

古文を味わう

〔知識・技能〕

名前

解

答

古文の作品

古文には、和歌、物語、随筆、日記、紀行文、説話などがあります。それぞれの代表的な作品には、次のようなものがあります。

- 和歌：『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』
- 物語：『竹取物語』、『源氏物語』、『平家物語』
- 随筆：『枕草子』、『徒然草』、『方丈記』
- 日記：『土佐日記』
- 紀行文：『奥の細道』
- 説話集：『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』

身に付けると...

文章の種類や作品の特徴に応じた読み方ができます。

やってみよう

〔解答・解説〕

作者 兼好法師（吉田兼好）は、京都の吉田神社の神官の家に生まれ、宮中に仕えましたが、三十歳ごろ出家し、仁和寺近くに小さな家を構えたとされています。作品 『徒然草』は、鎌倉時代末に成立した随筆です。序段と二百四十三段からなり、人生や自然について、人物の逸話なども交えて意見や感想を述べています。

現代語訳 仁和寺にいたある法師が、年を取るまで石清水八幡宮にお参りしたことがなかった。仁情なく思つて、あるとき立ち立つた一人、徒歩で参拝した。これだけと思ひ込んで帰つた。極楽寺や高良神社など、仲間僧に、向かつて「長年の間思い続けてきた。そのなげまつた。話のうらやまが、神に参拝するのが本来の目的なのだと思つた。山の上では見せんとした。案内者はあつてほしいものである。

一 ア

省略された主語を探すときは、述語の意味を確認し、前後の文脈から考えましょう。

二 いいける

語の頭がない「はひふへほ」は「わいうえお」と読みます。ここでは「言ひける」の「ひ」が「い」になるので、「いいける」が答えです。問題の「すべてひらがなで」に注意しましょう。

三 極楽寺・高良などのこと

・極楽寺・高良神社だけを挿んで、これだけだ、と思つて帰ってしまったのですね。でも、実は、他の人が登つて行つていたところこそ、石清水八幡宮があつたのです。

四 年ころは見ず

「」の終わりには、「と」「とぞ言ふ」「とや」などのように、「と」があります。「」の終わりには、「と」「とぞ言ふ」「とや」などのように、「と」があります。これを目印にして、会話文の最後を見付けましょう。

五 少しいことに、先達はあらまほしきことなり。

・随筆では、冒頭や最後に、筆者の主張や感想がよく書かれています。